PR

ジブリパークを歩いて Vol.8

映画の世界を楽しみながら職人仕事や建築の魅力を伝える場所に

中村武司（大工）

1965年、名古屋市出身。名城大学在学中から家業の大工として経験を積み、卒業後は建築の道に進む。20代後半から日本の伝統的な木造建築に興味をもち、日本建築セミナーや大工塾などに参加し研鑽（けんさん）を積む。近年は保育園児から大学生に至るまでの教育現場で「モノづくり」講座を数多く持つ。大工歴は今年で40年を迎える。

「サツキとメイの家」は今年、誕生から節目の20年を迎えました。2005年の愛知万博（愛・地球博）で「本物の家」として建てられ、現在はどんどこ森の主要施設です。建築を担当し、大工や板金工、瓦職人らを束ねる「親方」を任されたのが地元で活躍する大工の中村武司さん。建築の舞台裏や大工仕事の極意を熱く語りました。

ゆがみのあるガラス「Aランク」の材料に

陣頭指揮を執った宮崎吾朗さんとは03年冬に初めて面会しました。どう造るのかは知らなかったのですが、「映画のセットではなく、家を建てる」とのお話でした。だから、私にオファーがあったのだと思いましたね。年賀状をいただいた年明けから、動き出しました。

建築当時の「サツキとメイの家」（中村さん提供）

『となりのトトロ』を作った宮崎駿監督の希望はジブリのスタッフを通じ、「（映画の設定である）昭和初期当時の家を建ててほしい」と聞きました。「映画の絵どおりにこだわらなくてよい」とも伺ったので、あえて映画を見ませんでした。その代わり、名古屋にある同じ造りの建物などを参考にしました。

特に苦労したのは素材の調達です。例えば、当時の建物にはゆがみのあるガラスが使われていましたが、技術の発展により、現代では作られていません。解体現場を回ったり、知り合いの大工を頼ったりして集めていましたね。吾朗さんとも話し合い、ガラスを選別する際、最上級の「Aランク」をゆがみのあるものとし、ゆがみのないガラスほどランクダウンするという、普段の家造りとは逆の考え方で進めていました。お父さんの書斎の扉にある結霜（けっそう）ガラスは、私がコレクションしていたガラス。いつか使いたいと思っていて、ようやく生かせました。

結霜ガラス（ひし形の枠内）が昭和の雰囲気を演出

映画の世界をより忠実に150％の職人技で表現

「サツキとメイの家」が縁で、ジブリパークの木造建築にも携わりました。「地球屋」や「猫の事務所」（青春の丘）、「どんどこ堂」（どんどこ森）などです。依頼が来た時は何を造るのか分からない状態でしたが、「また楽しい仕事ができる」とワクワクしたのを覚えています。

『耳をすませば』の「地球屋」では、職人たちと相談しながら進める中でアイデアが生まれていきました。例えば、印象的なシーンに登場するバルコニー。細部まで表現すべきだと思い、図面や制作資料だけでなく、作品もしっかり確認しました。そこで、柵の一部のデザインがそろばんの玉に形が似ていると気づき、実際にそろばん職人に作ってもらうことに。ジブリパークは作品の世界に浸る場所なので、お客さんががっかりしないように、世界観を細部まで忠実に表現することを心掛けました。職人たちと趣向を凝らして建築し、求められたことに150％で返す。これこそが職人仕事の醍醐味です。

そろばん職人と力を合わせた「地球屋」のバルコニー

ジブリパークの建築物 子どもの原体験の場に

木造建築はきちんと手入れをすれば長く保てます。「サツキとメイの家」も20年間メンテナンスをし続けています。木造建築特有の「直す技術」こそが、1000年残る日本の建築を生み出しているのです。ただし技術だけではなく、残そうとする人の意志や建物への愛着が何より大切。「サツキとメイの家」が愛され続けているのは、そこに映画という物語が宿っていることも理由ではないでしょうか。

「サツキとメイの家」は今年、誕生から節目の20年

愛知万博では、「サツキとメイの家」を通して日本式の生活空間を海外にも伝えることができました。さらにジブリパークにも関わって、我が子のように思える、後世にも残せる建築を手掛けられてうれしく思います。ジブリパークは、映画の世界を楽しみながら職人の手仕事による〝本物〟に触れられる、建築の楽しさを感じてもらえる場所になってほしいですね。そして、次の時代を担う子どもたちの人間形成にもつながる原体験の場として、建築物を存分に活用していただきたいです。

前回は武重洋二さん。その記事はウェブサイトで公開中

チケットは予約制

© Studio Ghibli